

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 マアナゴ

学名 *Conger myriaster*

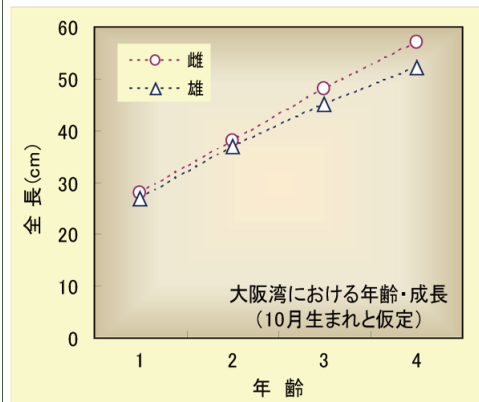
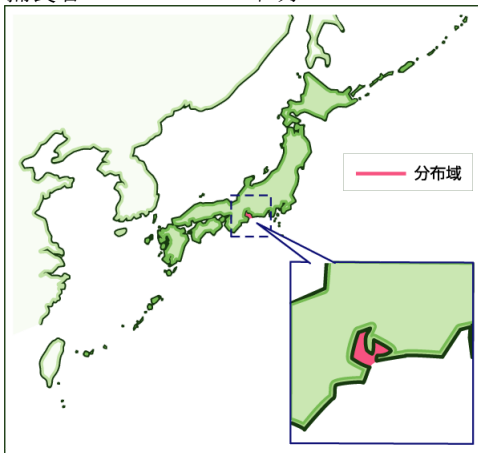
系群名 伊勢・三河湾

担当水研 中央水産研究所



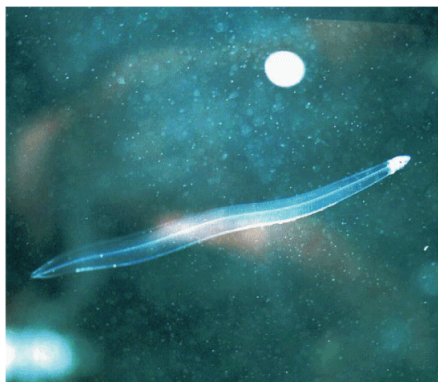
生物学的特性

寿命： 不明
成熟開始年齢： 不明、雌雄とも成熟個体が見つかっていない
産卵期・産卵場： 東シナ海等の我が国の南方海域が産卵場と想定されている、産卵期は不明
索餌期・索餌場： 周年、伊勢・三河湾
食性： 小型の底生生物、エビ類、魚類、軟体類など、成長につれ多様化
捕食者： 大型化
不明



漁業の特徴

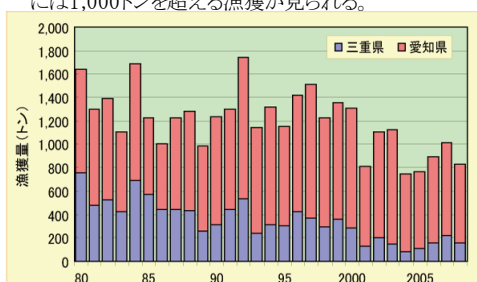
伊勢・三河湾における漁獲は主として、小型底びき網漁業、かご漁業により行われている。伊勢湾の三重県海域での小型底びき網の漁場は、湾奥部と湾口部を中心に、伊勢湾全域に形成される。かご漁業の漁場は、沿岸に沿って広く形成される。愛知県においては、知多地区の漁獲量が多い。また、本種の仔魚であるレプトケファルス(のれそれ)は、船びき網などで混獲されている。



マアナゴの仔魚(レプトケファルス)は「のれそれ」と呼ばれ、春季に湾内に来遊して船びき網などで混獲される。沿岸域に来遊する以前の生態は不明である。

漁獲の動向

愛知県及び三重県における1980年以降2008年までの漁獲量は、748～1,745トンの範囲で増減しており、概ね1,000～1,500トンの範囲内で推移している。2001年以降は減少して700～800トン台の年が多いが、2002、2003、2007年には1,000トンを超える漁獲が見られる。

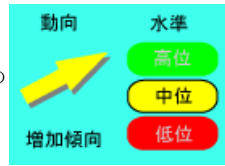


資源評価法

昨年までの資源評価においては、愛知県と三重県の合計漁獲量の推移を主たる判断材料としていたが、漁獲努力量の減少が依然継続していることから、本年より、小型底びき網CPUEを資源量指標値と見なし、その経年変化を主体として水準・動向の判断をすることとした。その他、漁法別月別漁獲量の推移、各県の生物情報収集調査、標本船調査および漁場一斉調査の結果も合わせて現在の資源状態を判断した。

資源状態

小型底びき網CPUEの経年変化から、資源水準は中位であり、過去5ヵ年の推移から動向は増加と判断される。なお、昨年までの評価では、愛知県および三重県の合計漁獲量を水準・動向の主たる判断材料としていたが、今年の評価から小型底びき網のCPUEの経年変化を主たる判断材料とする変更を行った。その理由は、昨年までの調査で漁獲努力量のデータが過去20年分揃い、直近年まで一貫して努力量が減少していることが確認されたことから、漁獲量を主たる判断材料とすることが適当でないと判断されたためである。昨年は低位であった資源水準が、今年は中位へと上昇したのは、判断基準の変更を行ったことによる効果が大い。



管理方策

伊勢・三河湾のマアナゴは、水産庁が推進する資源回復計画の対象魚種に指定されており、小型底びき網およびアナゴ簗に入網した小型魚の水揚げ禁止、再放流等の措置がとられている。本評価対象は、春季に仔魚（のれそれ）として伊勢・三河湾内に来遊したものが、その年の秋～冬季に漁獲加入し始め、翌年の春～夏季に漁獲の中心となる。したがって加入量あたりの漁獲量を増大させることを管理目標とした場合、秋冬漁期の小型魚を保護することが管理方策となる。さらに、「のれそれ」の漁獲はマアナゴ資源に対して影響を与える可能性があることから、船びき網等による「のれそれ」を対象とした操業を制限する管理措置が平成18年度から始まっている。

資源評価のまとめ

- 小型底びき網CPUEの経年変化等から判断して、伊勢・三河湾のマアナゴ資源は中位水準にある

管理方策のまとめ

- 伊勢・三河湾のマアナゴ資源量は、湾外から来遊する仔魚（のれそれ）の多寡により変動するものと推測され、漁業管理による加入量の制御は困難
- 加入量あたり漁獲量の増大が目標
- 秋冬漁期の小型魚の保護が主要な管理方策
- 「のれそれ」を対象とした操業を制限

資源評価は毎年更新されます。